

自由論題 3「東南アジアの政治」・報告 2

報告テーマ

オーストラリアにおける初期の東ティモール支援活動:フライ連邦議会議員(1974-84)を中心に  
“Early Australian supportive activities for East Timor: with a focus on Ken Fry, Member of  
Parliament (1974-84)”

氏名(所属)

木村 友彦(成蹊大学)

要旨(800字程度)

1974年以降インドネシアのスハルト政権は、東ティモール(ポルトガル領ティモール)の併合を目標とした政策を、軍事手段も用いて追求し、1976年7月17日には27番目の州として併合したことを宣言した。これに対して東ティモール独立派のフレティリンは、全面侵攻が始まった1975年12月7日以降は山岳地域に撤退してゲリラ戦による抗戦を始め、ラモス=ホルタなど一部の指導者は、国連決議も根拠に海外で外交手段により抵抗した。それにもかかわらず、オーストラリア政府を含む各国政府が、インドネシアとの関係を重視して併合を黙認していくなかで、東ティモールでは大量殺戮と深刻な人権侵害が続いた。このなかでオーストラリア社会では、こうした状況に疑問を覚えた人々が、様々な支援活動を試みるようになった。

本報告の目的は、オーストラリアにおける初期の東ティモール支援運動について、1974年から84年まで連邦議会下院議員を務めた労働党左派のフライ(Ken Fry: 1920-2007)に注目し、その一端を明らかにすることである。フライに特に注目するのは、平議員とはいえ、独立を含む東ティモールの民族自決を一貫して支持した当時の代表的な連邦議会議員であるためである。

本報告は、フライ議員が東ティモール問題への関与を始めてから、解決策を見出せずに失意の引退をするまでの活動について、本人の回想録を含む様々な資料を基に検討する。フライ議員の活動には、ウィットラム労働党政権期の2回の現地視察、1975年11月以降のフレーザー保守連合政権期の野党議員としての国内外での様々な批判的活動、そして同政権による併合承認を批判した労働党綱領にもかかわらず、1983年3月に発足したホーク労働党政権が併合を追認していったことへの異議申し立てが含まれる。フライ議員の活動は、当時は東ティモール問題の根本的解決やオーストラリア外交の方針転換には結びつかなかったが、長期的には1999年の解決を導く世論形成に貢献したと言えるのではないかと。